

患者を  
支える人々

## 患者と家族の悩みに対応 口調ゆっくり 相手和ませる



### ソーシャルワーカー 佐原まち子さん

東京都文京区にある東京医療  
歯科大病院の医療福祉支援セン  
ターは、3階エスカレーターの上  
すぐ近く。5人のソーシャルワ  
ーカーと1人の在宅医療専門看  
護師が、入院中や外来の患者と  
家族の悩みに対応している。  
副センター長で社会福祉士と  
精神保健福祉士の国家資格を持  
つ佐原まち子さん(55)はソシ  
ヤルワーカーになって33年。が  
ん患者からの相談で最も多いの

は退院後の療養先選びと言う。  
おまかに、病院は手術など  
治療が中心の急性期病院と療養  
に比重を置く慢性期病院に分か  
れ、急性期の治療後の患者は自  
宅や慢性期病院、緩和ケア病棟  
などに移る必要がある。  
近年は在宅療養を希望する患  
者が増えてきた。だが、本人も  
家族も不安は大きい。佐原さん  
は、面談で患者のこれまでの生  
き方や考え方、現在の状況を聞  
き、在宅療養をサポートする仕  
組みを説明する。慢性期病院や  
緩和ケア病棟を希望する患者に  
は、地域の病院を紹介したり、  
手続きを手伝ったりする。

患者の不安や悩みは幅広い。  
「治療費が払えない」「医療保  
険に入っていない」といった不  
安や、「がんになったことを会  
社にどう話せばいいか」などの  
相談が寄せられる。家族からは  
「本人にどう告知したらいい  
か」「患者とどう向き合えばい  
いか」と尋ねられる。一人ひとり  
と40〜50分かけて面談し、話を  
整理し、必要な情報を伝える。

東京都新宿区の伊藤照美さん  
(45)は母が大腸がんで突然入院  
したとき、佐原さんに何度も相  
談した。「情報のやりとりだけ  
でなく、励ましてもくれて心強  
かった。駆け込み寺のようだし  
た」と振り返る。  
動き回るが、口調はゆっくり。  
面談で深刻な話題になっても、  
クスツとした笑いを心がけ、相  
手を和ませる。  
この仕事のやりがいはいは「いろ  
いろな生き方を学べること」。  
患者や家族の話に心動かされ、  
涙ぐむこともあるが、常に「全  
体を見ずして、客観的に判断し  
ます」。

細味の日本画と篠笛で心を静  
める。が、いまは、病院のソ  
シャルワーカーらでつくる日本  
医療社会事業協会の研修会講師  
として、週末に全国を飛び回  
る。(医療ジャーナリスト・福  
原麻希)

79年から関東通信病院(現NCT東  
日本関東病院)に勤務。02年から現  
職。元国立がんセンターがん対策情報  
センター運営評議会委員。4児の母。

毎日、佐原さんは15〜16件の  
相談に対応する。院内を忙しく

アスパラクラブのホーム  
ページに福原さんの取材  
記を掲載しています